富士川義之先生と久保内端郎先生のご退職にあたって

英米文学科主任　佐藤　真二

富士川義之先生は、平成１０年度から１０年間にわたり、駒澤大学文学部英米文学科における教育と研究にご尽力された。その間、平成１７年度と１８年度には大学院の専攻主任を努めて頂いた。なによりも富士川先生は、その間いろいろな意味において英米文学科の中心であった。また、特に大学院においては、多くの大学院生を育てられ、その中からは博士号を取得した者もあり、後に大学で教鞭についている者も少なくない。日本英文学界で会長を務められた先生は、東京大学退官後も引く手あまたであったことであろうが、教員生活の最後の１０年間を、駒澤大学の本学科で過ごされることを選んで頂いたことは、幸運であり光栄なことであった。学科事務室や、宴席などでも、気さくで、ユーモア豊かで、かつ学問や芸術の香りのするお話をされていた姿は懐かしい。

久保内端郎先生には、平成１６年に赴任して以来、５年間のうち最後の２年間は大学院の専攻主任を務めて頂いた。先生は、それに先立つ４年間非常勤講師として務められている。先生のおっしゃる‘small 4 and large 5’である。富士川先生同様に博士号取得から大学教員へと導いて頂いた大学院生もある。学部においても、学生のあいだに英語史に関する興味を確立し、その中からは、学内および学外の大学院に進学するものも出てきている。専門分野は異なるが､学科内で二人のみの英語学専門であった久保内先生と私は、この２年間、それぞれ専攻主任と学科主任ということもあり接する機会が多くあった。その中からも、学問に対する真摯な姿勢を垣間見ることができたことは私にとって大きな財産である。

平成２１年３月５日には、「初期英語研究とテクストの問題－ヴァリアントをめぐって－」（久保内端郎）、「文学と絵画－ラスキンとラファエル前派－」（富士川義之）という演題で最終講義を行って頂いた。タイトルから推察される通りの質の高い内容で、最後まで、学問と芸術に対する研究者としてのあるべき姿を示して頂いた。この学問的遺産を我々は引き継いでいかなければならないと痛感している。